■第62回企画展

# 病をいやす　～くすり・まじない・神だのみ～

会期：平成22年3月27日(土)～5月5日(水･祝)　会場：特別展示室

写真１　御守冊手本［天保３年（1832）］
（館蔵立石 coll.214）

写真２　新撰病草紙［巻子、昭和８年（1933）写］
（東北大学附属図書館医学分館蔵／写真提供）

**今も昔も変わりなく、誰もが求める、心と体の「いやし」。**

**本展では、医療の恩恵を得ることが難しい時代や環境に生きた人々が、どのようにして「病」と向き合ってきたのかを示す多彩な資料を紹介します。**

**春色和やかな季節は博物館でちょっとひとやすみ。展覧会を通して「健康」を見つめ直してみてはいかがでしょうか。**

## はじめに　ふたつの出会い

当館には、近年ご寄贈いただいた民間信仰に関する貴重なコレクションが2件あります。

ひとつは久慈地方を拠点とする宗教者が用いていたと考えられる330点の文書類［立石コレクション］です。その多くは、人々の願いをかなえるために書き留めた（写した）であろう御札の書式見本やまじないの方法――特にも生業の安全や豊穣、病防除の方法――からなります（写真1）。もうひとつは、全国各地の社寺が頒布した約1,900点からなる神仏画や御札などの資料群［鎌田コレクション］です。これらの資料を紐解いていくと、当時の人々がどのような願いを強く抱いていたのかを酌むことができます。

今回の展覧会は、多くの皆さまや機関よりお借りした資料に、この2件のコレクションの一部を加え構成しました。

## 絵画資料にみる　病のかたち

近ごろは便利なもので、本やインターネット、テレビなどの媒体を通して、私たちは簡単に医学知識の一端を得ることができます。

しかし、医学が発達していなかった時代、医学知識が一般に知られていなかった時代には、「病」は人々の目にどのように映っていたのでしょうか。

ちなみに、写真2は嘉永3年（1850）に作られた病草紙という絵巻の一場面です。ウナギを裂こうとして怪我をした指先がウナギの形に変形してしまったという男性を描いています。ウナギの殺生の祟りと思われたのでしょうか。患者のそばには、僧侶のような宗教者の姿が見えます。

## 正体みたり？！　病のもと

写真３　姫国山海録（部分）
（東北大学附属図書館蔵）

この生きものはなに?! …その正体は、信州の沼に現れた「虫」なのだそうです。おどけた愛嬌のある仕草をしていますが、皆さん油断してはいけません。この虫に舐められると虫病（腹痛などの病気）を患うと説明が添えられています。

体調異変を引き起こす原因が判然としない時代を生きた人々にとって、その脅威は計り知れないものであったことでしょう。しかし、その正体を見極めなければ何の対抗策も講じられず、病と向き合うことすらできません。

結果、祟りや呪い、未知なる生物の怪異などが病気の原因として生みだされ、その調伏＝病気治癒のための修法が盛んに行われました。当館の立石コレクションの中にも、そのような活動を示す資料が散見されます。

## 神さま仏さま！　祈りに託す想い

**写真４　両手両足図絵馬**［慶応２年（1866）］
（北上市　千手観音堂蔵）

この絵馬は、千手観音を祀る御堂に奉納されていたものです。伝承は途絶えてしまいましたが、おそらくはリウマチなど手足の病治癒を祈願したものなのでしょう。

**写真５　「め」字絵馬**［文久３年（1863）］
（久慈市　蛭子神社）

一方、こちらの絵馬はかつて薬師如来を祀っていた神社へ奉納されたもので、眼病治癒を祈念したものと考えられます。

このように、病防除の御利益で知られる神仏に祈りをささげ病気平癒を願う方法も、かつては一般的に行われていました。もちろん、県内には今も地元の方々に親しまれる病防除の神様仏様がたくさんいて活躍しているようです。

## 口ににがし？　薬に託す想い

**写真６**　八戸南部家旧蔵　**人魚のミイラ**
（八戸市博物館蔵／写真提供）

写真6は八戸藩南部家旧蔵品の人魚のミイラで、江戸時代後期のものと推定されます。紙の張り子、シュロの木、魚の口やウロコを材に製作されています。

人魚は八百比丘尼の長寿伝説で知られるように不老不死の象徴として語られ、時に妙薬になる、その絵を見るだけで病が治るなどと語られました。

## 身体へのいたわり　長寿と養生

くどくなる、気短になる、愚痴になる、心はひがむ、身は古くなる…。

花巻の三画人のひとり、小野寺周徳の筆になる「老人六歌仙」（写真7）の画賛には、江戸時代に人気があった〝老い〟をモチーフとする狂歌がしたためられています。

**写真７　老人六歌仙図**［江戸時代後期］
（花巻市博物館蔵／写真提供）

老人六歌仙

しわがよる　ほくろの出来る　背はちゞむ
あたまははげる　毛はしろくなる
手はふるふ　あしはよろつく　歯はぬける
耳は聞へず　目はうとふなる
身にあふは　頭巾・ゑり巻・つへ・目がね
たんぽ・おんじやく・しゆびん・孫の手
くどふなる　気みぢかになる　愚知になる
心はひかむ　身はふるふなる
聞たがる　死とむながる　淋しがる
出しやばりたがる　世話やきたがる
又しても　同じ咄しに子をほめる
達者自慢に人はいやがる

人は生を受けてから死を迎える過程の中で老いを経験します。この画賛は〝老い〟の変化を否定せずに受け止めたうえで、どのような余生を過ごすのかが大事である、そう投げかけているように思えてなりません。

（学芸員　川向富貴子）

**●講演会**　当日受付・聴講無料　13:30～15:00
4月29日（木・祝）「病をいやす神仏の姿」　大矢邦宣 先生（盛岡大学教授）

**●展示解説会**　当日受付・要入館料　　各回14:30～15:30
3月27日（土）、4月18（日）、5月3日（月・祝）

**●講座**　当日受付・聴講無料　13:30～15:00
4月25日（日）「病はどこからやってくる－俗信の真相－」　川向富貴子（当館学芸員）

春の博物館の風景